第３６期第６回京都市社会教育委員会議の模様をマナビィがレポート！

令和６年１２月２６日（木）、京都市総合教育センターにおいて、第３６期京都市社会教育委員会議の第６回目となる会議が開催されました。「新京都戦略（骨子）」について議論されました。

■　出席委員（１７名のうち１１名）　※五十音順

伊住　禮次朗 委員、戌亥　慎吾 委員、大脇　晋太郎 委員、園部　晋吾 委員、永田　紅 委員、七海　薫子 委員、原　敏之　委員、本郷　真紹 委員、柾木　良子 委員、松田　規久子 委員、森　清顕 委員

第３６期第６回京都市社会教育委員会議　次第

開　　会

１　議　事

（１）「新京都戦略（骨子）」について（概要説明）

（２）市民活動について（七海委員による実践報告）

（３）協議

２　報　告

（１）京(みやこ)まなびぃニュースレターについて

（２）生涯学習市民フォーラム　令和６年度総会・設立３０周年記念講演会について

３　主催事業及び刊行物の案内

閉　　会

■　議　事（１）「新京都戦略（骨子）」について（概要説明）

※　この会議では、令和６年１２月４日に公表された「新京都戦略（骨子）に対するパブリック・コメント（意見募集）の実施」時に示された資料をもとに、説明・議論しております。また、パブリック・コメント（意見募集）は終了しています。

○　事務局説明（小野生涯学習推進課長）

京都市では、松井市長の就任以降、市民や有識者との対話を重ね、市政の内容などについて点検を行ってまいりました。また、来年度に計画期間が終了する現行の京都市基本計画「はばたけ未来へ！京（みやこ）プラン 2025」にかわる次期総合計画「長期ビジョン」（計画期間：令和８年～32 年）の策定に向けた議論も始まっております。こうした中で、来年度末が計画終期となる「行財政改革計画」を前倒しで改定し、市長の任期となる令和６～９年度に取り組む政策や、しごとの仕方改革、財政・組織体制等の今後の方針を示すものとして、この

たび「新京都戦略（骨子）」が作成されました。

「新京都戦略」では、京都の価値や強み、ポテンシャルを活かした「攻めの都市経営」により、『すべての人に「居場所」と「出番」がある「突き抜ける世界都市　京都」』を「目指すまちの姿」として、「政策」「しごとの仕方 改革」「持続可能な行財政運営の確立」の３つを一体的に進め、特に先導的な取組を『リーディング・プロジェクト』に位置付け、強力に推進してまいります。

まず、「目指すまちの姿」として、具体的には、「まち中に夢中になれるものが満ちあふれるウェルビーイングなまち」、「世界中から人々がつどい、多様な主体と交ざり合い、新たな価値を創造する『ぬか床』のようなまち」、「日本中、世界中の人々があこがれる 唯一無二のまち」を目指します。

また、「目指すまちの姿」の実現には、京都の人やまちが永い歴史の中で培ってきた「まち柄」を活かすことが不可欠です。「まち柄」とは、歴史の中で育まれてきた生活文化、住民自治の伝統、大学のまちといった「文化・自然」、「精神性」、京都ならではの「強み・特性」などです。

そうした 京都の価値・強みを踏まえつつ、「ひらく（開・拓）」「きわめる（究・極）」「つなぐ（継・絆）」という３つの視点のもとで、シームレス（分野横断的）かつ先導的な取組を 11 個の『リーディング・プロジェクト』としてまとめました。

『政策集』は、『リーディング・プロジェクト』とは別に６つの柱を設け、市長公約等を盛り込み、令和９年度までに取り組む内容として 115 項目が挙げられています。

「しごとの仕方改革」は、これまでの削減に軸足を置いた「行財政改革」から政策本位の「しごとの仕方改革」へ、市民にとっての「あるべき姿」の実現に取り組むための役所や職員の姿勢・取組等が挙げられております。

「財政・組織体制」については、先ほどご説明した「政策・施策」や「しごとの仕方改革」を進めるために、持続可能な行財政運営を目指し、限りある財源等を京都の価値を高める施策に重点配分するとともに、財政の健全性を担保してまいります。

本戦略策定後は、客観的なデータや専門的な知見を基に、戦略に掲げた取組を磨き上げながら着実に推進してまいります。また、取組状況は市民の皆様と共有し、効果を計測できる指標を設定して進捗管理を行います。あわせて、新しい公共の推進、国や府等との連携により、戦略を推進してまいります。

なお、本日いただいたご意見は、事務局で取りまとめ、社会教育委員会議からの意見として、総合企画局に報告いたします。

■　議　事（２）市民活動について（七海委員による実践報告）

○　七海　薫子　委員（市民公募委員）

私が活動している団体「右京太秦芸能人会」は、2001 年に太秦の映画スタッフ有志で設立されました。京都の伝統工芸や祭り、狂言などを記録し、プロと市民が共に地域を盛り上げる活動を行っています。最近では、不登校の子どもたちとラジオを制作するなど、警察署やＮＰＯ等地域の協力を得て様々なプロジェクトを進めています。京都という地域は、子どもたちの活動・居場所について相談すると、積極的に協力してくださり、すばらしいと感じました。また、アナウンサーの経験から、

声が出せない子の発声練習や、引きこもりの方の表現指導なども行っています。外に出て、実際に人と触れ合うと新たな発見があり、生きる力が湧いてきます。

現在は、女優活動や映画の企画原案に加え、生きづらさを抱えた子どもや大学生の支援、まちおこし活動にも力を入れています。2020 年からはコロナ禍で休校を余儀なくされた子どもたちのためにラジオ制作を開始し、放送劇を通じて多くの人々の居場所づくりを支援しています。声だけで表現する放送劇は、高齢者や体の不自由な方、視覚障害者の方など、誰でも参加できる生涯学習活動として活用されています。京都府とも連携し、2021・2022 年には大学生と地域おこしの取組「京都府　学生×地域つながる未来プロジェクト」も進めました。大学生の成長に貢献できたことを嬉しく思います。

また、地域の自治会やこども園等でチャンバラ体験教室を定期的に行っています。斬る人、斬られる人に分かれてお芝居を体験し、なぜ人を傷つけてはいけないかを考え、歴史に興味を持つきっかけになっています。

映画『なまくら』は、児童文学作家・吉橋通夫氏の小説をもとに、2016 年から５年間かけて制作しました。撮影では、綾部市黒谷町の紙すきなど、地元の方から地場産業の技術指導を受け、一方では地元の方へカメラや着物の着方などの技術指導を行い、地域の文化や伝統を記録・継承することに貢献しました。

活動を通して、やりたいことができる、活躍できる、仲間と安心して過ごせる居場所がいかに大切かを感じました。これからも映画制作を通じて、地域おこしや生涯学習の場づくりに取り組んでいきたいと考えています。

○　本郷　真紹　議長（学校法人立命館理事補佐・立命館大学文学部特命教授）

「新京都戦略」の概略と七海委員のこれまでの実践について紹介いただきました。構想を立てることは比較的簡単ですが、実践するには時間的、労力的、財源的な制約があります。制約の中で優先順位をつけ、どう実践するかが重要な問題です。日常生活の中で、行政とは異なる視点から、感じることや課題について、ご意見を出していただけるとありがたいです。

○　柾木　良子　委員（同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師）

優先的に解決すべき課題が３点あります。

１つめが、人口減少です。地価・家賃の高騰により京都人が京都に暮らせないのは大問題です。私の周りでも、若い世代が家賃や物価高騰により、京都市から滋賀県等に引っ越す話を聞きます。若い子育て世代が住みにくいまちとなっています。また、教育を充実させることも大切です。

２つめは、大学のまちで学生は多いですが、就職で京都を出てしまうことです。大企業に京都に支社をつくってもらったり、イタリアやフランスのように新市街・旧市街と分けて、まちなかでは京町家等を残して観光都市としての機能を保存しつつ、京都駅周辺等は高さ制限をなくしてオフィス・住居タワーを建てるといった思い切ったことをしないといけないと思います。若者が働く場所の確保が必要です。

３つめは、**Ⅱ目指すまちの姿**に「居場所」と「出番」とありますが、確かにベンチャーなど新しい企業への対応は柔軟ですが、伝統産業・文化の分野で若い人が頑張ろうとしても、「一見さんお断り」のように受け入れてもらえない、出番がないという場合があります。伝統産業や文化を担っていくのは生易しいものではないことを痛感していますが、やる気のある若い人の芽を摘まないように、器を大きくして受け入れる体制が必要だと思います。

○　伊住　禮次朗（茶道総合資料館副館長）

私は「長期ビジョン」策定に関連して若手チーム（京都市未来共創チーム会議）に参加しています。

子育て世代を含め、京都は住みにくいまちになっていると感じます。**政策集④**で、「子どもたち」や「若者」とありますが、京都市は小学生以上の取組は充実していますが、それより下の幼稚園児や乳幼児向けの取組が極めて少ないと感じています。小学校に入る前の子ども対象のものは、子どもだけでなく保護者や家族も一緒に参加する形になります。子どもが生まれたタイミングで京都市から転出してしまうことがないよう、乳幼児等への取組もインパクトのあるメッセージと共に政策に明確に反映していただきたいです。

○　松田　規久子　委員（京都新聞社文化部編集委員兼論説委員）

Ⅱ目指すまちの姿の「すべての人に」は観光客や世界中の人々も含んだ広い意味で使っていると思いますが、そこばかりが反映されているようで、「すべての世代に」のほうが京都市民としては受け入れやすいと思います。また、子育て世代だけでなく、中高年や高齢者にも住みにくいまちになりつつあるのではないかと感じています。

政策集①にある「博物館機能の整備」は、京都市考古資料館や歴史資料館など、入館料が安価もしくは無料で、行きやすく調べやすく、地元に密着した展示があるといった良いところは残していただく一方で、京都市京セラ美術館は京都市民には敷居が高いような感じがします。せっかく京都には多くの美術館・博物館があるので、京都の人が足を運ぶ機会がもっと増えるような仕組みを作っていただきたいです。地下鉄やバスの市民優先だけでなく、文化

や伝統芸能、伝統工芸といった分野でも、京都に暮らしている人たちが関心を持ちやすい仕組み作りを忘れないでほしいと思います。

○　永田　紅　委員（歌人、京都大学大学院農学研究科助教）

Ⅱ目指すまちの姿、「ぬか床のようなまち」とは思い切ったネーミング。ぬか床では、発酵など多くの反応が起こっていて、野菜だけでなくいろいろなものを投入し、毎日混ぜてあげないといけないという、町の活気のために必要なことが意識されています。自分がぬか床を混ぜた経験があるからその意図がわかりますが、経験のない人にもこの“小宇宙”という感覚がうまく伝わってほしいと思います。

Ⅴリーディング・プロジェクト①（世界中からクリエイティブ人材がつどい・交じる「テラス」のまちプロジェクト）の部分、大学には必ず留学生支援室があるので、市とうまくつながれば、さらに取組が広がるのではないでしょうか。

３つの視点「ひらく」「きわめる」「つながる」では、それぞれに漢字が２つずつ考えられていておもしろいですね。３つのキーワードだけでは読んで流れてしまいやすいので、イメージカラーやピクトグラム（絵文字）をつけるのも１つの方法かと思います。

最終的に「新京都戦略」が完成したときに、どのようにして京都市民全体に行き渡らせるのか。アナウンスの方法や浸透のさせ方が大事だと思います。

七海委員の発表では、不登校の子どもに発声練習を教えているとお話がありましたが、専門の立場から、声の出し方など具体的な表現法を教えてもらえることは自信にもつながり、とても良いサポートだと思いました。また、映画の撮影を通して、お釜でご飯を炊くなど昔の暮らしに触れるのもおもしろいと感じました。

○　大脇　晋太郎　委員（市民公募委員）

Ⅶしごとの仕方改革編（特に［取組１］多様な主体との協働）で、行政主導か民間主導かがわかりにくいです。行政は、資料をそのまま PDF で出すという手法を取りがちですが、例えば協働の事業で人を集めたいとき、ソーシャルメディアを使い、広告のプロからの意見をもらって、人材を集めるのが良いのではないかと思います。

また、私は京都出身ではありませんが、京都は、出身地に関係なく、社会教育委員になったり、子ども食堂を始めることを受け入れてくれるまちでした。ですので、外からは入りやすい、住みやすいまちだと感じています。

この資料を大学生が見たらどんな反応をするかを考えると、「やりたいことがどれかわからない」、「理想はあるけど市役所の窓口がわからない」と言うと思います。参加しないのではなくて、できないようです。やる気はあり、自分の力で何かを変えたいという顕示欲もあるようなので、単純に「若い人が来ない」というのは違うと思います。資料をそのまま使うなら、かなり丁

寧に説明しないといけないですし、具体的に「こういうことをするので、こういう人はここに来てください」とお知らせの仕方にもうひと工夫が必要だと思います。

○　本郷　真紹　議長（学校法人立命館理事補佐・立命館大学文学部特命教授）

ターゲットを明確にし、場合によってはプロの手を借りてアプローチの方法を工夫することも大事だと思います。

他の地域から来ている学生から、京都は楽しく、学生にとってやさしいまちだと感じたと聞きます。昨今はネット情報だけで事足りる学生が多いようですが、実際に体験したらおもしろく、のめり込んでいったということもあります。ある一線を越えることが難しいですが、様々な活動に自主的に参加してもらうような仕組みを構築していけば、必ず結果が出てくると思います。

○　原　敏之　委員（日本労働組合総連合会京都府連合会会長）

日本のサラリーマンの７～８割が中小企業で働いておられ、最低賃金も安く、協力しないということではないけれどもそれどころでないというのが現実です。人口減少は京都だけではないので、パイの取り合いとなります。住みたいまち、働きたいまちとして、外国の方にも京都市で働いてもらって、家族とともに京都に根づいていただき人口を増やしていくことも考えていけたらと思います。

○　戌亥　慎吾　委員（令和６年度京都市ＰＴＡ連絡協議会会長）

京都の文化や伝統は強みであり、関心をお持ちの方も多いですが、関心のない方もいます。伝統文化とは違った京都の魅力を、違う角度から考えればもっと新しい発想が出るのではないかと思います。

子育て世代にとって、市内は子どもたちと家族で遊べる場所が少なく、他府県に出て遊ぶことが多いように感じます。これは京都に足りない点だと思います。山科・伏見・洛西など周辺部も含めて住みやすいまちになるよう取り組んでいただきたいです。

七海委員からチャンバラ体験や学生が参加するラジオ発信の取組についてお聞きし、学生が新しいことを考え、古いものと新しいものが融合できるようなまちづくりや、違った角度で京都の魅力を発信できればおもしろいと思いました。

○　本郷　真紹　議長（学校法人立命館理事補佐・立命館大学文学部特命教授）

京都市の計画ということで、概観し、全ての課題を抽出して検討されると思いますが、それぞれ地域の特性と課題があり、観光でも生活文化でも、地域的特性と課題をミクロの視点から見直していくことが必要です。その中でトータルとして住みやすいまち、魅力的なまちについて考える必要があります。

○　園部　晋吾　委員（NPO 法人日本料理アカデミー副理事長、山ばな平八茶屋主人）

Ⅱ目指すまちの姿の「すべての人」という表現は大事ですが、すべての人が平等で同じような条件のもとで交わっていくというイメージがあります。全て同軸・同列上に並べるのではなく、それぞれがお互いを尊重し合い、協力し合っていけたらいいのではないかと思います。全部入り交じらせて新しい化学反応を起こしたり、殻を破って新しいことを作ることも大事かもしれませんが、ずっと同じことをやってきた結果が今の京都で、京都の強みでもあるので、芯はそれぞれがしっかりと持っていた方がいいのではないかと思います。

私は「DO YOU KYOTO？ネットワーク」というグループに属しており、メンバーにはお茶やお花、漆工芸など様々な分野の方々がおられて、グループで環境のことを考える活動をしています。生活リズムも労働時間も休みも全然違う条件の人たちが集まって、自分たちでできることをやっています。

何もかもひとくくりに同じ条件で平等にではなく、それぞれの置かれている環境・立場、強み・弱みをお互いに認め合うことが大事で、その中で連携できることを連携していく。すると、新しいものが生まれてくるけれども、連携したからといって私や相手の仕事が変わるわけではありません。お互いの世界にいるけれども、連携していけるところは連携する。それが根底にある方がお互いの尊重につながっていくと考えています。

○　森　清顕　委員（北法相宗宗務長、清水寺執事、上智大学グリーフケア研究所非常勤講師）

まち存続のためにも人口減少は早急に考えないといけません。地価上昇により投資目的でマンションが購入され、中心部が空洞化し、固定資産税が高いために、町家がなくなっています。

Ⅴリーディングプロジェクト③（市民生活と「観光」の両立）に、是非とも「観光防災」を入れていただきたいです。大学で防災の授業をしたとき、清水寺は自警団で災害対応をする気概でいましたが、高齢化と人口減少で、観光でその場にいる人の手も借りないと対処できない状況になりつつあると感じています。災害時、東山清水地域には昼間最大２万人の人がいるところに、東山区の細い袋小路で住民が災害に遭ったときにどうしようもないという現状があります。緊急車両の道路の誘導など、その指揮権限は誰にあるのか、一般市民がやっていいのか等、我々だけでなく、面の防災・減災のプロジェクトが動き出しています。

市民と観光客との温度差が激しくなっているのは明白ですが、私たちはもう一度、地元の人との関係性を再構築しないと、今後なりゆかないと考えています。例えば、地元の人を対象に、境内に夜店を出すイベントをしたり、除夜の鐘を地元の人についてもらいやすい工夫をしています。防災の話もそうですが、観光客がいるから市民が犠牲になったとか、それこそ命に関わることになってくると、今後、京都市民が京都を本当に嫌いになって出て行ってしまうという事態が

起こりかねないと感じています。

「ぬか床」という言葉にあるように、ボーダレスになってきているのはまちの力が弱くなっている、京都らしい縦割りの力が弱まってきているようにも見えました。これはチャンスかもしれないし、一方で失っているものもあるかもしれません。

「ぬか床」という言葉はおもしろいですが、誰がかき回すのか、市役所か、市民か、一人ひとりがかき回すのか、そこで今後の話の行き先が変わってくる気がします。

スタートアップやクリエイティブ人材を集める話（Ｖリーディング・プロジェクト①）は、「町衆が育てる」という気概がだんだん薄れてきていると感じています。大企業による新しい事業への投資も昔より少なくなってきています。

■報告－１　京(みやこ)まなびぃニュースレターについて

「未来へつなぐ、京の食文化」をテーマに、関連の施設やWebサイト、給食レシピを掲載しました。園部委員に「和食を伝える」をテーマにコラムを執筆いただきましたので、ぜひお読みください。

■報告－２　生涯学習市民フォーラム　令和６年度総会・設立３０周年記念講演会について

１１月１５日に、京都市生涯学習市民フォーラム令和６年度総会及び設立３０周年記念講演会を開催しました。総会では、フォーラム副会長の本郷議長にもご登壇いただき、京都市生涯学習推進者表彰や、新規加盟団体の紹介などを行いました。司会は、七海委員に務めていただきました。また、設立３０周年を記念し、有斐斎弘道館館長で京都市教育委員の濱崎　加奈子氏に「文化の学び舎としての京都～伝統文化再生から見えてきたもの～」と題したご講演をいただきました。

■　生涯学習部長　挨拶

■　閉　会

※この摘録の作成には補助的に生成AIを利用しています。